

様態「そうだ」の使用制約に関する記述の再考

－日本語教育での扱いを含めて－

宮口 徹也

(岡山理科大学留学生別科)

本稿の目的は、いわゆる様態の「そうだ」の適否について従来の研究でなされてきた記述を再考し、「そうだ」本来の機能の視点から新たな説明を提示することである。これまでの研究では、「そうだ」は「きれい」などの外観を表す形容詞には使えないといった記述がされることが少なくなく、日本語教育においてもそれに準じた説明が採用されている。しかし、実際にはそれらの形容詞にも「そうだ」が使用できる場合はあり、特定の形容詞を一概に不可とする記述の仕方は不適切であると考えられる。本稿では、「そうだ」の本質的機能が「未確認」の事態を述べることにあるという見方に基づき、「きれいそうだ」といった表現が実際にどのような場面で用いられているか、コーパスの用例をもとに考察を行う。その上で、「そうだ」の適否は、特定の形容詞ではなく、言及される事態が話者にとって未確認であるか否かによって決まることを主張する。また、日本語教育への応用として、この見方に基づく「そうだ」の指導法を提案する。

キーワード：そうだ、様態、日本語教育、モダリティ

1. はじめに

本稿の目的は、日本語の文末形式の1つである、いわゆる様態の「そうだ」¹ (以下「そうだ」と呼ぶ) について、その使用の可否に関する先行研究の記述、とりわけ外観を表す形容詞²との使用に関する記述を再検討することである。一般に「そうだ」は主に次の2つの用法があるとされる(寺村 1984)。1つは「雨が降りそうだ」のように動詞に接続し、ある動的事象の生起が予想されることを表す用法、もう一方は「このケーキはおいしそうだ」のように主に形容詞に接続し、ある性質が外観から窺えることを表す用法である。日本語教育では「そうだ」は初級で導入される文法項目の一つだが、その際にもこれら2つの用法が扱われるのが一般的である。「そうだ」については、これまで数多くの研究で用法の記述が行われてきたが、一部の研究及び日本語教材では、その使用の可否に関して次のような指摘がなされることがある。それは、同じ形容詞であっても「外観を表す形容詞」には「そうだ」を使用することができないとする記述である。このような記述は、次のような場合に「そうだ」の使用が不適切となることを根拠とするものである³。

(1) *この花はきれいそうだ。

(2) *この景色は美しそうだ。

こうした観察に基づき、一部の先行研究では「そうだ」は外観を表す形容詞にはつかないと記述されており、日本語教育の主要教材においても、これに準じた説明が採用されている。だが、「そうだ」がそれらの形容詞につく例をよく考えてみると、実際にはすべての場合にこの記述が当てはまるわけではないことがわかる。例えば、上と同じ「きれいそうだ」「美しそうだ」であっても、次のような場合には適格な文として成立し得る。

(3) ここは夜景がきれいそうだ。

(4) 宇宙から見る地球は美しそうだ。

こうした事例の存在は、外観を表す形容詞自体に「そうだ」が使用できないのではないことを示しているが、管見の限り、「そうだ」の用法を扱う研究において、こうした例外的事例を取り上げているものはなく、日本語教育でも「きれいそうだ」のような言い方は一般にはしないものとみなされている。しかし、上記のようなケースが認められる以上、この種の形容詞を一概に不可とする記述の仕方は不適切であり、「そうだ」の適否を正確に記述する

には、特定の形容詞に依るのではない、新たな視点からの説明が必要であると考えられる。そこで、本稿ではコーパスの用例をもとに、実際に「そうだ」が外観を表す形容詞に用いられる事例、特に「きれいそうだ」の用例を考察し、「そうだ」の機能からその使用の可否を決定付ける本来の要因を考える。その上で、「そうだ」の使用が不適切となる場合に関して、日本語教育ではどのように指導すべきか、従来に代わる新たな方法を検討し提案する。

2. 先行研究と問題点と本稿の立場

2.1. 先行研究の記述

「そうだ」の使用の可否を考えるにあたり、まず外観を表す形容詞に関連して、過去の研究でどのような記述がなされてきたか見てみることにする。「そうだ」の用法を記述した研究はこれまでに数多くあるが、その適否に関してこの種の形容詞に言及した記述は、日本語教材を含め、いくつかの研究に見ることができる。筆者が確認できた限りでは、豊田（1987）、庵・高梨・中西・山田（2000）、宮崎（2003）、市川（2005）、藤村（2009）、Banno, Ikeda, Ohno, Shinagawa, & Takashiki（2011）、スリーエーネットワーク（2016）の7点に該当する記述が見られた。以下、表1に該当部分を引用する。

表1 外観を表す形容詞に関する先行研究の記述

豊田（1987, p.4）	<p>ふつう「そうだ」は形容詞について使われるが、すべての形容詞に続くことが可能なわけではない。</p> <p>この花はきれいそうだ。</p> <p>（部屋の中を見て）「この部屋は広そうだ」</p> <p>「この紙は真っ白そうだ」</p> <p>という言い方はしない。それは、「そうだ」が外見から判断してその様な性質、状態に見えるという意味を表す機能を持った語であるため、先のような場合は、判断の余地のない外見をしめしているからであろう。</p>
庵他（2000, p.128）	<p>(4) (5) の「きれいだ」「背が高い」のように一見してわかる性質には「そうだ①」は用いることができません。（中略）</p> <p>(4) ×あの人はきれいそうです。</p> <p>(5) ×田中さんは背が高そうです。</p>
宮崎（2003, pp.158-159）	<p>「*この凶形は丸<u>そうだ</u>」や「*あの女性は美<u>し</u>そうだ」とは言えないように、形容詞の表す性質が外観そのものであるような場合には、「(し) そうだ」は使用できない。</p>
市川（2005, pp.128-129）	<p>観察対象の外観から受ける「感じ（兆候）」を表す場合、「おいしそうだ」「おもしろそうだ」とは言えますが、「きれいそうだ」「青そうだ」とは言うことができません。（中略）「一見してわかる性質のものには様態を表す「～そうだ」は使いにくい」というのが一般的な説明です。</p>
藤村（2009, p.366）	<p>見てすぐわかる場合には使わない。</p> <p>例) ×このりんごは赤そうです。○このりんごはおいしそうです。</p>
Banno et al.（2011, p.34）	<p>With an adjective for which visual evidence is crucial, such as きれいな, we do not use そう and say that something is きれいそうです, if it looks pretty; we already have enough evidence to conclude that it is pretty.</p> <p>（「きれいな」のように視覚的証拠が不可欠である形容詞には「そうだ」は用いず、何かがかきれいに見える場合にそれを「きれいそうです」とは言わない。きれいだと判断するに足る証拠がすでにあるからである。）（筆者訳）</p>
スリーエーネットワーク（2016, p.154）	<p>外見そのものを表現する「きれい」「ハンサム」や「白い」「赤い」などの色を表す形容詞は普通使わないことを説明する。</p>

これらの記述で初めに注目したいのが、やはり一部が外観を表す形容詞自体を使用不可と明記している点である。例えば、豊田（1987）は「そうだ」が「すべての形容詞に続くことが可能なわけではない」（p.4）とし、「判断の余地のない外見」（同）を表す形容詞には「そうだ」が使えないと説明している。これに似た記述は日本語教師向けの文法解説書である市川（2005）にも見られる。「そうだ」について同書では「観察対象の外観から受ける「感じ（兆候）」を表す場合、（中略）「きれいそうだ」「青そうだ」とは言うことができません」（p.128）と説明している。

外観を表す形容詞自体を不可とする記述は、日本語教材にも見ることができる。Banno et al.（2011）は英語母語話者向けの日本語教材であるが、同書では「we do not...say that something is きれいそう, if it looks pretty.（何かがかきれいに見える場合にそれを「きれいそうです」とは言わない。）」（p.34、筆者訳）と説明しており、この記述も「きれい」という形容詞自体が使えないとする立場は同じである⁴。また、スリーエーネットワーク（2016）も日本語教材に対応した教師用指導書であるが、同書にも「そうだ」の指導に関して「外見そのものを表現する「きれい」「ハンサム」や「白い」「赤い」などの色を表す形容詞は普通使わないことを説明する」（p.154）とあり、概ね同様の姿勢が認められる⁵。

一方で、庵他（2000）、宮崎（2003）、藤村（2009）では、外観を表す形容詞自体が使えないとは明記していないものの、「そうだ」の使用が不適切となる場合について同種の形容詞を用いた説明がなされている。例えば、宮崎（2003）は「形容詞の表す性質が外観そのものであるような場合」（p.159）に「そうだ」が使用できないとして、「この図形は丸そうだ」「あの女性は美しそうだ」など外観にそのまま言及するケースを例に挙げている。また庵他（2000）も「一見してわかる性質」（p.128）、藤村（2009）も「見てすぐわかる場合」（p.366）に「そうだ」が使えないとし、同様に外観を表す形容詞を用いた例を示している。これらは「外観そのものである」「一見してわかる」「見てすぐわかる」とあるように、特定の形容詞というよりも、見たまを述べるということの問題としており、この点で外観を表す形容詞自体を不可とする上記の研究とは見方が異なる。

2.2. 先行研究の記述における問題点

以上、「そうだ」の適否について先行研究の記述を見てきたが、上述のように、これらの記述は外観を表す形容詞自体を不可とするものと、見たまを言う場合に「そうだ」が使用できないとするものの概ね2つの立場に分けられる。これらの記述の問題点を考えてみると、まず前者については正確性の問題が指摘できる。先に見たように、外観を表す形容詞は、場合によって「そうだ」の使用が可能であり、一概にそれらを不可とするのは記述としては不正確である。また他方で、後者についても記述としての曖昧さの問題が指摘できる。これらはいずれも「見たまを述べることを問題にする一方で、「見る」という行為の主体は特に明記されていないわけではない。そのため、「外観そのものである」「見てわかる」といった場合に、それがどの視点から見たものであるかは不明確であり、記述として複数通りの解釈の余地がある。実際に「見てわかる」という記述も、話者の視点から見て明らかであるという解釈のほか、観察一般により明らかになるという特定の視点に依らない、より広い意味での解釈も可能であろう。「そうだ」の適否をより正確に記述するには、こうした曖昧さも排除した記述の仕方を考える必要があると思われる。

2.3. 本稿の見方

以上に見た記述が不十分であるとすると、「そうだ」が使えない場合についてはどのように記述するとよいだろうか。本稿では、これについて「そうだ」の基本的意味を論じる田野村（1992）、菊池（2000）の見方を援用することとしたい。「そうだ」の基本的意味について、田野村（1992）は「まだ確認されていないことがらに考えを持つこと」（p.4）とし、菊池（2000）もこれを「可能世界（＝確認・確定された現実とは区別して捉えられた世界）」（p.21）を思い描いて述べることで述べている。両者に共通するのは「そうだ」を「未確認」の事態を述べるものとしている点であるが、これについて菊池（2000）はさらに「<現実>をそのまま<現実>として述べる場合、ソウダはなじまない」（p.22）とした上で、「そうだ」が使えない場合として次の例を挙げている⁶。

(5) [食べ物をお口にしたら] *おいしソウダ。

(6) [人の容貌を観察して] *あの人、ずいぶん目が大きいソウダね。(菊池 2000, p.22)

菊池によれば、これらの場合に「そうだ」が使用できないのは同じ理由である。つまり、これらの場合、言及される「おいしい」「目が大きい」といった事態がいずれも話者によってすでに確認された事態(<現実>)であるために、それらを未確認の事態(<可能世界>)として思い描くことができず、「そうだ」の使用が不適切となるのである。本稿においても、「そうだ」の適否の本質は、このように未確認の事態を述べる「そうだ」本来の機能にあると考える。つまり、本来的に「そうだ」はその真偽が明らかではない、未確認の事態を述べるものであるために、話者によりすでに確認されている事態に言及するような場合には「そうだ」は使用できないのである。

このように考えた場合、先行研究でとりわけ「きれい」などの外観を表す形容詞が注目されやすい理由も次のように考えられる。すなわち、外観を表す形容詞は、典型的にはそれによって叙述しようとする対象を話者が目にしている場面で用いられるものであるが、一方で「外観」はその性質上、話者がその対象を見ている限りにおいては未確認の事態には通常なり得ないものである。実際に、花を見ている場合に「(その花が)きれいであること」が未確認であるような場面は考えにくい。そのため、「きれいそうだ」のような表現が成立するには、外観に言及しながらも、話者はその対象を見ていないという特殊な場面を想定することが必要となる。つまり、外観を表す形容詞は「おいしい」のような他の形容詞と比べ、それだけ「そうだ」の使用できる場面が少ないのである。先行研究でこの種の形容詞が注目されやすい理由も、こうした「そうだ」との本来的な相性の悪さにあるのではないかと考えられる。

逆に言えば、(3-4)のような例が成立するのは、これらがまさに上記の特殊な場面に該当するためだと考えることができる。すなわち、「(夜景が)きれいであること」「(地球が)美しいこと」は、外観ではあるものの、あくまで話者の想像であり、実際に見て確認された事態ではない。したがって、これらの場合には言及される事態が話者にとって未確認であるということで「そうだ」の使用が可能となるのである。こうした外観を表す形容詞に「そうだ」が用いられる例は、実際にコーパスでも数多く見られるが、未確認の事態を述べるという「そうだ」の機能から見ると、それらの場合に「そうだ」が用いられる理由についても同様の理解が可能ではないかと考えられる。そこで以下では同じ視点から、典型例である「きれいそうだ」の用例を考察し、各例においてなぜ「そうだ」の使用が可能であるか考える。また併せて「きれいそうだ」がどのような場面で使用されるか、その分類も行う。

3. 「きれいそうだ」の用例と使用場面

一部の研究ではそれ自体が不可とされることのある「きれいそうだ」という表現も、コーパス上では数多くの用例を見つけることができる。実際に『NINJAL-LWP for TWC』(筑波ウェブコーパス)で検索してみると、74件の用例が見つかった。本稿ではこのうち引用元のリンクから原文を直接参照することができた37件を対象とし考察を行った⁷⁾。

先述のように、「そうだ」が未確認の事態に用いられると考えた場合、「きれいそうだ」という表現が成立するのは、「きれい」ということが話者によって確認されていない場面である⁸⁾。ただ上記の用例の中には、そのような視点からは判断しがたい例も一部見られた。例えば次のような場合である。

(7) アマゾンで手頃な値段でキレイそうな出物があったら、すぐにゲットします。

上記の例では「出物」について「キレイそう」と述べているが、これは実在するものではなく、仮定の文脈で挙げられているものである。このように「きれい」とされる対象が実在しない場合、それが「きれい」であることを話者が確認しているか否かは判断できない。また他方で、すでに確認されている事態についても次のように「きれいそうだ」と表現している例も見られた。

(8) 一見きれいそうに見えるかもしれませんが、実は腐りまくりで使い物になりません。

この例は車体の部品について述べたものである。ここでは後半の内容からそれが「きれいでない」ことは話者によってすでに確認されていることがわかるが、同じ物について「きれいそう」と表現されている。本稿では、このように本来的に確認できない事態あるいは確認済みの事態に用いられる「そうだ」は、未確認の事態を述べる機能から二次的に生じた用法であると考えられる。つまり、「そうだ」は典型的には何かを見て判断する際に用いら

れるものだが、これらの場合には敢えて「そうだ」を用いることによって事態の真偽は別にして「そのように見える」ことを描写する効果を得ているのだと考えられる。このように描写に主眼のある「きれいそうだ」の用例は37件のうち6件で見られたが、本稿ではこれらは「そうだ」の中心的用法とは異なるものとして今回の考察から外すこととした。

これらを除いて考えた場合、「きれいそうだ」という表現が可能な場面としてまず想定されるのは、話者が「きれい」とする対象を目にしていらないような場面であるが、残りの「きれいそうだ」の用例はすべてこれに該当するだろうか。以下では、話者がすでに対象を見ているか否かという観点から用例の場面を分類し、各場合になぜ「そうだ」の使用が可能となるか考えてみることにする⁹。

3.1. 使用場面（1）：対象を見ていない場合

初めに話者が対象を見ていない場合に「きれいそうだ」と述べる例を見てみよう。このケースに該当する用例は31件のうち9件で見られた。以下に一部を引用する。

(9) まず、自分が部屋に帰っていい気持ちで呼吸をできない場所に、HAPPY がやってくるとは思えないですね。。。サーヌさんの部屋って綺麗そうだなあ〜。

(10) ギリシャとかもよさそーですね。スイスとかも行ってみたいいな〜めっちゃきれいそう。まあでもきりがないのでどこにしようか迷いますね。

(9) の例はブログ記事へのコメントとして書かれたものである。ここではコメントの投稿者である話者が、ブログ運営者の「サーヌさん」という人物の部屋について「綺麗そうだ」と述べている。当該のページには部屋を写した写真は特に掲載されていないことから、これはブログの内容等から話者が運営者の部屋を想像し述べたものと推察される。また、(10) は Q&A 形式の掲示板でのやり取りの一部である。ここでは話者がお勧めの海外旅行先を質問しているのだが、(10) はスイスを勧める回答に対して話者が返信したものである。「きれいそう」と述べているのはスイスについてであるが、ここでも特に写真が載せられているわけではなく、話者は回答の文面等からスイスの様子を想像し述べていると判断できる。「そうだ」が未確認の事態を述べるのに用いられることを考えると、これらの場合に「きれいそうだ」という表現が可能であるのも、話者が「きれい」とする対象を直接目にしておらず、「きれい」ということが未だ確認されていない、想像上の事態であるためと考えることができるだろう¹⁰。

3.2. 使用場面（2）：対象をすでに見ている場合

先述のように、「きれい」とする対象を目にした上で「きれいそうだ」と言えるような場面は本来考えにくいだが、用例の中には実際にそのように使われているケースが8件見られた。このうち半数の4件は写真を見ているもの、残り4件は直接見て述べているものであった。以下で順に各例を見ていくことにする。

写真を見て「きれいそうだ」と述べている例としては次のようなものがあつた。

(11) 丹頂鶴の里はバスの時間の関係で無理そうです。きれいそうなのに残念です。

この例は Q&A 形式の掲示板でのやり取りの一部だが、ここでは旅行で北海道を訪れる話者が、阿寒湖近くのお勧めの観光スポットを尋ねている。(11) は「丹頂鶴の里」という場所を勧める回答に対して話者がコメントしたものである。コメント先の回答には「丹頂鶴の里」の案内のリンクが添付されていることから、ここで話者が「きれいそう」と述べているのも、リンク先の写真を見てのことであると推察される。次も同様に写真を見て述べているケースである。

(12) 空港にシャワーや仮眠をする所まであるんですね。写真を見ると綺麗そうなので、寝過ぎてしまいそうです。これも Q&A 形式の掲示板からの抜粋だが、ここでは北京の空港で乗り継ぎをする話者が空港内での時間の潰し方について質問している。(12) は空港に併設の休憩施設を勧める回答に対してコメントしたものである。この回答にも施設案内のリンクがあることから、ここで話者が「写真を見ると」と述べているのも、リンク先の写真を指したものと考えられる。つまり、この例でも話者は写真に写る施設を目にした上でそれを「綺麗そう」と表現しているのである。

先に見たように、「きれい」は話者がその対象を目にしている場合には通常未確認の事態として成立するとは考えにくいだが、それにもかかわらず、これらの場合に「きれいそうだ」と表現できるのはなぜだろうか。この理由と

しては次の2つが考えられる。まず1つは、写真を見ただけでは必ずしも「きれい」と断定できるわけではないということである。同じように対象を目にしていたとしても、写真等で間接的に見ている場合には、鮮明さ、色合い、質感等の多くの側面で話者の得られる情報は実際に見る場合には大きく劣ることとなる。したがって、そのために話者が外観の様子を断定するに至らないような場合には、それは依然として未確認の事態となり得るのだと考えられる。つまり、これらの場合に「そうだ」が使用可能であるのも、同じ理由から話者にとっては「きれい」が未確認の事態であるためと考えることができるだろう¹¹。

また2つ目の理由として考えられるのが「きれい」の表す性質の違いである。「きれい」は外観としての「美しさ」のほかにも「清潔さ」を指して用いることもできるが、この意味で用いられた場合、「きれい」は単純に観察のみにより断定できる事態であるとは言えない。実際に何かは清潔であるか否かは、直接それを手にしたり、厳密には機器を用いて調べたりしない限り判断のしにくいものである。したがって、「清潔さ」を指して用いられた場合、写真を見ているとしても「きれい」は話者にとって当然未確認の事態であり、ゆえに「そうだ」の使用も可能になるのだと考えることができる。特に空港の休憩施設に言及する(12)のような場合、「きれい」はこの意味で用いられていると解釈するのが自然だろう。

一方で、対象を直接目にした上で「きれいそうだ」と述べている例も4件見られた。以下に一部を示す。

(13) 本栖湖に観光に行ってきました。水深122メートルと富士五湖の中で一番深い湖です。ここはあまり開発されていないみたいで、水はきれいそうでした。

(14) フィールドアスレチックの傍に、「じゃぶじゃぶ川」と看板があります。なかなかキレイそうな水が、石作りの川を流れています。

(13)の例はブログ記事の一節であるが、ここでは話者が「本栖湖」を訪れた際に見た湖の水を「きれいそうでした」と表現している。また、(14)は公園を紹介するサイトからの抜粋だが、ここでも話者が訪れた公園内を流れる川の水を「キレイそうな水」と表現している。これらで意図されているのは、水が「汚れていない」ということであり、ここでも「きれい」は「清潔さ」を指して用いられていることがわかる。これらの場合に「きれいそうだ」という表現が可能であるのも、「きれい」が話者にとっては未確認の事態であるからだと考えられる。つまり、清潔であるか否かは、やはり直接対象を見ていたとしても容易には判断しにくく、「きれい」が話者にとって未確認であることで、この場合も「そうだ」の使用が可能になるのである。直接対象を見て「きれいそうだ」と述べる例では4件ともすべてが「清潔さ」に言及したものであったが、これは「美しさ」を指して「きれい」を用いる場合、同じ場面でそれが未確認の事態として成立することが難しいからであろう。逆に言えば、「きれい」が「清潔さ」の意味で用いられる限りにおいては、話者が対象を見ていることは必ずしも「そうだ」の使用を制限する要因にはならないと考えられる。

3.3. 使用場面(3)：中間的事例

前節で見たのは、対象の見たままの様子を「きれいそうだ」と表現する例であったが、用例の中には同じように対象を目にしながらかも、異なる条件下での様子やその他の見えない部分を想像して述べるといった中間的な事例も14件見られた。例えば、次の2つはいずれも眼前の対象について、別の時期、時間帯での様子を想像して述べたものである。

(15) こちらも灯りが灯ると更に綺麗そう！

(16) 桜の季節には綺麗そうだ。各自R418に足を踏み入れたことに興奮し始める。

上記の例はいずれも旅行ブログからの抜粋であるが、(15)は話者が旅行先で撮った日本家屋の写真についてコメントしたものである。その写真には日本家屋の昼間の様子が写っているのだが、ここで話者は夜に明かりが灯ったときの様子を想像して「綺麗そう！」と表現している。また、(16)の例は、話者が旅先で撮った桜の木々の写真にコメントしたものである。写真に写っているのはまだ色付いていない開花前の桜の木であるが、ここで話者は同じ木について開花時期の様子を想像し「桜の季節には綺麗そうだ」と表現している。このように対象を見た上で異なる条件下での様子を想像して述べるケースは14件のうち9件で見られた¹²。

一方で、対象を見た上でその他の見えない部分を想像して述べる例としては、次のようなものがあった。

(17) こちらはバンガロー。中は見れませんがきれいそうです。

(18) ちなみに新館はとてもキレイそうだったので、次回行く機会があったらぜひ新館に泊まりたいですね。

(17) はキャンプ場を紹介するブログ記事の一節だが、これはキャンプ場にあったバンガローを外から見た話者が中の様子を想像して述べたものである。また、(18) は宿坊の宿泊客が書いたレビューであるが、ここでは旧館に泊まった話者が、その際に目にした新館の様子から客室等を想像して述べている。このように対象を見た上でその他の見えない部分の様子を想像し述べるケースは5件見られた。

上記の2つのケースにおいて「きれいそうだ」という表現が可能であるのも、やはり「きれい」が話者にとって未確認の事態であるためと理解できる。上記の例はいずれも対象を見てはいるものの、言及されている事態は観察した様子ではなく、あくまで想像上の事態である。つまり、これらの場合にも「きれい」が話者にとっては未確認であることから「そうだ」の使用が可能となるのである。

4. 外観を表す形容詞と「そうだ」の適否

以上の考察から「きれいそうだ」の適否は次のようにまとめられる。すなわち、「きれいそうだ」はそれ自体が表現として成立しないのではなく、「きれい」ということが話者にとって未確認の事態であれば「そうだ」を用いて「きれいそうだ」と表現することも可能である。ただし、「美しさ」を指して「きれい」を用いる場合、その対象を話者が直接見ているような場面では、その様子を「きれいそうだ」とは通常表現できない。この場合、「きれい」は未確認の事態とはならないからである。一方で、「清潔さ」を指して「きれい」を用いる場合には、対象を見ているということ自体は、「きれい」か否かを判断するための決定的な証拠にはならない。そのため、この意味で用いる限りにおいては、同じ場面でも「きれい」は未確認の事態として成立し、「きれいそうだ」という表現も可能となる。また、どちらの意味であっても、目にしている対象の異なる条件下での様子や見えない部分を想像して述べるような場合、「きれい」はやはり未確認の事態となるため、「きれいそうだ」という表現が可能である。

外観を表す形容詞は「きれい」のほかにも数多くあるが、それらに「そうだ」が使用できるか否かも同様の視点から理解することができるだろう。つまり、「美しそうだ」「赤そうだ」などの他の形容詞を使った場合も、それらによって表される事態（「美しい」「赤い」）が話者にとって未確認であれば表現として成立する。ただし、「清潔さ」を指すこともできる「きれい」とは異なり、それらの形容詞は外観以外の意味で用いることは少ない。そのため、対象を直接目にしてその様子を述べようとする場合（「*このりんごは赤そうだ」）には、それらの形容詞では必然的に「そうだ」の使用が制限されることになる。

5. 日本語教育での「そうだ」の指導法

最後に、本稿での議論をもとに日本語教育における「そうだ」の指導法を再考してみることとしたい。先述のように、「そうだ」についてこれまでの研究では「外観を表す形容詞には使わない」といった記述が一部でなされており、日本語教育の現場でもこれに準じた説明がされることが少なくない。確かに「きれいそうだ」という言い方はしないと指導することは、学習者の無用なエラーを防げるという利点はあるかもしれない。特に英語母語話者の場合、「It looks beautiful. (きれいに見える)」を意図して「きれいそうだ」と言ってしまうといったことがしばしば見られるが、それもこうした説明をすることである程度は防げるだろう。しかし、実際に「きれいそうだ」という表現が使われる以上、これ自体を不可とするような説明はやはり指導上適切であるとは言えず、学習者に対し「そうだ」の使い方を正確に示すためには、これに代わる説明を考える必要があると思われる。

本稿では「そうだ」が未確認の事態を述べるのに用いられるということを見てきたが、日本語教育でもこの見方に基づいて「そうだ」の適否を説明することを提案したい。つまり、「そうだ」の使えない場合については、「きれい」「美しい」のような特定の形容詞を取り上げてそれらを「使えない」とするのではなく、「話す人から見てすでにわかっていることには使えない」と説明するのである。

実際の指導にあたっては具体的に次のような方法が考えられる。まず「そうだ」の簡単な導入を図った後に、ステップ1として「おいしい」「おもしろい」等の外観以外を表す形容詞を例に、「そうだ」が使える場面と使えない場面を対比して示す(下図1)。例えば「おいしい」なら、それは食べ物を見ている場面と口にしている場面である。そしてこれを他の形容詞でも繰り返しながら、未確認の事態（「話す人から見てまだ本当かどうかわからないこと」）に「そうだ」を使うことを学習者が理解できるようにする。その上で、ステップ2として「きれい」等

の外観を表す形容詞を使い、同じように「そうだ」が使える場面と使えない場面对比して示す(下図2)。「きれい」なら、景色を想像している場面と花を直接目にしている場面である。これを他の外観を表す形容詞でも繰り返す。このような流れで「そうだ」が使える場面と使えない場面がステップ1の場合とは異なることを示し、これらの一部の形容詞では未確認となる場面が違うということを学習者が理解できるようにするのである。

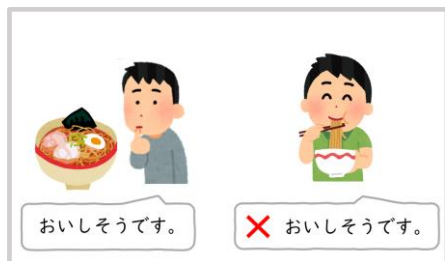


図1 「おいしいそうだ」の提示例



図2 「きれいそうだ」の提示例

(イラスト引用元: 『いらすとや』 <<https://www.irasutoya.com/>>)

従来の説明の仕方では「きれいそうだ」のような表現はないものとして扱うほかないが、上記のような指導をすることで、「きれいそうだ」自体が使えないのではなく、「きれい」のように外観を表す形容詞を使う場合とそれ以外の場合とでは「そうだ」の使用できる場面が異なること、どのような場合に「きれいそうだ」のような表現が実際に言えるのかを学習者に対してはより明確に示せるのではないかとと思われる。

6. おわりに

本稿では外観を表す形容詞と「そうだ」の適否の関係を再考したが、「そうだ」はそのような特定の形容詞に使用できないのではなく、それらの表す事態が観察により確認しやすいものであることから、やや特殊な場面を考えない限り、未確認の事態を述べる「そうだ」には使用しにくいのだと理解することができる。ただし、同種の形容詞でも、「きれい」は外観の「美しさ」だけではなく、観察のみでは判断しにくい「清潔さ」を指して用いることもできる。したがって、この意味で「きれい」が用いられる場合には、対象を直接見ていたとしても「そうだ」を用いて「きれいそうだ」と表現することも可能である。従来の研究では「きれいそうだ」を含め、「そうだ」が外観を表す形容詞には使用できないと記述されることもあったが、本稿では「そうだ」の適否が特定の形容詞によって決まるのではなく、その形容詞により表される事態を話者が確認できているか否かによって決まるということを実際の用例とともに示せたのではないかとと思われる。また、日本語学習者に対しても「そうだ」の使い方を正確に伝えることを考えた場合、本稿で示したような指導の仕方が有効であろう。一方で、本稿では「そのように見える」ことを描写する「そうだ」の用法については二次的なものとして考察対象には含まなかったが、「そうだ」の用法をさらに深く理解するためには、これがどのように用いられるかについても詳細な考察が必要であると思われる。この点については今後の課題としたい。

注

- 1 「そうだ」には「今日は雨が降るそうだ」のように伝聞を表すものもあるが、本稿ではこれは扱わない。
- 2 本稿では、いわゆる「形容動詞」もナ形容詞としてイ形容詞と合わせて「形容詞」と呼称する。
- 3 例文の「*」は当該の文が不適格であることを表す。
- 4 ただし、Banno et al. (2011) は学習者向けの教材であることから、敢えて単純化した説明を採用している可能性もある。
- 5 スリーエーネットワーク (2016) は「普通使わない」としていることから、それらの形容詞が使われる場合があることは示唆されている。ただし、具体的にどのような場合に使われるかは触れられていない。
- 6 菊池 (2000) は他の要素との区別のため「そうだ」をカタカナで表しているが、これは表記上の差であり、本稿で扱う「そうだ」との違いはない。ここでは原文のまま引用する。

- 7 原文ページの最終閲覧日はいずれも 2023 年 12 月 27 日である。
- 8 本稿では書き言葉を考察対象とするため、厳密には「話者」ではなく「書き手」だが、これ以降も便宜上そのように呼ぶ。
- 9 本稿で扱うコーパスの用例はインターネット上の書き言葉であるため、話者が対象をすでに見ているか否かは厳密には判断することができない。そこで、本稿では引用元のウェブページを参照した上で、ブログ等で話者自身が実際に目にしたものについて言及している場合、写真等、対象を写した視覚的資料が掲載されている場合は「対象を見ている場合」、それ以外は「対象を見ていない場合」と判断し分類した。
- 10 冒頭に挙げた作例 (4) 「宇宙から見る地球は美しそうだ」はこのケースに該当すると考えられる。
- 11 この点に関しては菊池 (2000) も次のように説明している。
 (先に挙げた (6) 「あの人、ずいぶん目が大きソウダね。」の例について)
 「目が大きソウダね」は、ピンぼけの写真を<現実>として見ながら、その人物の実際のイメージを<可能世界>として思い描くような場面になら使える。(p.22、丸括弧は筆者による補足)
- 12 作例の (3) 「ここは夜景がきれいそうだ」はこのケースに該当すると考えられる。

引用文献

- 庵功雄, 高梨信乃, 中西久実子, 山田敏弘 (2000). 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 市川保子 (2005). 『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
- 菊池康人 (2000). 「いわゆる様態の「そうだ」の基本的意味—あわせて、その否定各形の意味の差について—」『日本語教育』107, 16-25.
- スリーエーネットワーク (2016). 『みんなの日本語 初級Ⅱ 第2版 教え方の手引き』スリーエーネットワーク
- 田野村忠温 (1992). 「現代語における予想の「そうだ」の意味について—「ようだ」との対比を含めて—」『国語語彙史研究』12, 1-20.
- 筑波大学・国立国語研究所・Lago 言語研究所 『NINJAL-LWP for TWC』 (<https://tsukubawebcorpus.jp>)
- 寺村秀夫 (1984). 『日本語のシンタクスと意味 Ⅱ』くろしお出版
- 豊田豊子 (1987). 「「そうだ」(様態)の意味・用法と否定形(1)」『日本語学校論集』14, 1-13.
- Banno, E., Ohno, Y., Sakane, Y., Shinagawa, C., & Takashiki, K. (2011). *GENKI: An Integrated Course in Elementary Japanese II Second Edition*. Tokyo: Japan Times.
- 藤村知子 (2009). 「第23課 雨が降りそうです 様態、切迫、比況」東京外国語大学留学生日本語センター指導書研究会 (編) 『直接法で教える日本語』東京外国語大学出版会, 363-379.
- 宮崎和人 (2002). 「認識のモダリティ」仁田義雄・益岡隆志・田窪行則 (編) 『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版, 121-171.

A Reconsideration of the Descriptions of the Usage Constraint of

Soo da ‘it appears’:

Including its Treatment in Japanese Language Teaching

Tetsuya Miyaguchi

(Okayama University of Science)

The purpose of this paper is to reconsider the previous studies’ descriptions regarding the (in)appropriateness of the use of a Japanese modal expression *soo da* ‘it appears’ and to present an alternative explanation based its original function. In previous studies, it is often described that *soo da* cannot be used with adjectives that express appearance such as *kirei* ‘beautiful,’ and similar explanations have been adopted in Japanese language teaching. However, in reality, it is not difficult to find cases where *soo da* is actually used with such adjectives, and describing those specific adjectives as unusable is not appropriate. Based on the perspective that the essential function of *soo da* lies in describing an “unconfirmed” situation, this paper examines the examples of *kirei soo da* ‘it appears beautiful’ observed in the corpus to see how they are actually used. The paper argues that the (in)appropriateness of *soo da* is determined not by specific adjectives but rather by whether the situation mentioned is unconfirmed for the speaker. As an application to Japanese language teaching, the paper also proposes a new instructional method for *soo da* based on this viewpoint.

Keywords: *soo da*, appearance, Japanese language teaching, modality